

歴博「佐倉連隊にみる戦争の時代」を訪ねて（2006月8月）

京成佐倉駅前より田町車庫行きのバスに乗れば三駅、国道296より坂を上って歴博の玄関先まで入ってくれる便がある。上がってゆく坂は愛宕坂。坂の上り口のすぐ左手を折れると旧成田街道で、市役所前の急な海隣寺坂へと通じ、坂の手前を296に出れば、京成佐倉への徒歩コースになる。

カタログは、重いし、家での置き場所にも困り、近頃は買わないことにしているのだが、900円という値段もあって、つい手が出てしまったのだが、今はカタログ片手に、これを書いている。夏休みなので、子ども連れもちらほら見える。展示は「Ⅰ佐倉城から佐倉連隊兵営へ」「Ⅱ佐倉連隊の兵営生活」「Ⅲ佐倉連隊と地域」「Ⅳ佐倉連隊と戦争」「Ⅴ佐倉連隊跡地の変遷と佐倉城周辺の歴史遺産」の5部構成である。

アルフレッド・ジェラルド瓦

パートⅠでは、佐倉城跡が明治期歩兵連隊敷地になり、その跡地の一部に会場である国立歴史民俗博物館が建設されたという複雑な沿革がわかる。すでに、1874年（明治7年）には兵舎が建ち、歩兵第2連隊（後の第57連隊）が入ったという。その兵舎は、白壁、アルフレッド・ジェラルド瓦（横浜のフランス人による製造）の屋根、コーナーストーン張りの2階建てで、何枚かの瓦と破片が展示され、その表には「ALFRED GERARD YOKOHAMA」の文字が型押しされている。当時の建物の面影を残すのが、仙台市歴史民俗博物館として利用されている、旧第四連隊兵舎だという。その写真は瀟洒な、いかにも機能的なつくりだに思えた。佐倉の兵舎は、その後和風に建て替えられ、太平洋戦争後は引揚寮や校舎として利用されていたという。その兵舎の外観、内部が映像で残されていたのが、ここでロケをした、1952年製作『真空地帯』（野間宏原作、山本薩夫監督）であったというから驚きであった。陸軍内務班のいじめやリンチ場面が多いという映画を見る勇気がないまま、見逃していた作品である。会場のテレビでは、8分ほどの旧兵舎内や周辺で撮影した暗いリンチ場面が繰り返し流されていた。西村晃、高原駿雄、下元勉、木村功らの顔が見える。その当時の新劇人、後テレビで活躍した俳優たちの若き日の群像を見るようだ。見覚えがあっても名前が思い出せない俳優も多かった。つい最近、テレビで渥美清の「拝啓天皇陛下様」（1963年製作、棟田博作、野村芳太郎）を見たときも同様、加藤嘉、長門弘之、藤山寛美、左幸子、高千穂ひづる、多々良純などの顔は分かるのだが……。映画はさておき、本題に戻ろう。

たった49日間の兵士

パートⅡでは、兵士の日常的な暮らしに焦点をあてる。兵卒は二等兵、一等兵、上等兵、下士官は伍長、軍曹、曹長に分かれる。さらに、士官（将校）は、少・中・大が各尉・佐・将に分かれる、などという「兵隊の位」をかつて聞いたことがある。

「隊内内務規定」、隊内雑誌「五七」などと一緒に、ある上等兵による「軍隊日記」や「班長殿訓話」など個人蔵の貴重な資料が目をつけた。

このコーナーで、さらに私が関心を寄せたのは、「田代雅章」という兵士の名前であった。1936年、二・二六事件に第57連隊から東京に治安出動し、殉職した二等兵の名

である。当時の『千葉読売』3月3日付けには、「某方面に勤務中の 田代上等兵死亡戦友に護られ郷里成田へ 近く〇〇連隊葬に」の見出しで報じられている。2月29日に殉職し、直ちに上等兵に特進ともあった。コーナーには第57連隊長、山口直人名の4月4日連隊葬開催の案内はがき、歩兵第2旅団長、関亀治の「弔辞」、営庭での連隊葬の写真、成田町での町葬の写真が展示されていた。いずれもご遺族なのか「田代恵一氏所蔵」とある。弔辞には「閑院宮邸御警護中流弾ノ為不幸頭部ニ重傷」とあった。また、順路で言えば少し前の「入営」コーナーの陳列にあった「入営者の挨拶葉書」の差出人の名前も田代雅章であり、「昭和十一年一月十日」付けであった。これも「田代恵一氏所蔵」とあったのである。田代雅章さんは1月10日入営、2月29日殉職という、兵士生活49日の短期間で、まさに二十歳で逝ってしまわれたことがわかる。「流弾」というが誰が誰に向けて撃った弾だったのか。新聞記事には「涙ながさぬ父と母」とあったが、本人の悔しさ、ご両親の気持ちを思うといたたまれない思いがした。そして、丁寧にきちんと遺品や写真を保存されている田代恵一さん。さらに、展示会場では気がつかなかったのだが、カタログ27頁「入営」の項に「1936年（昭和11）1月9日 成田から佐倉連隊に赴く入営者の歡送記念写真」のキャプションを付す写真の「祝入営」の幟になんと「田代雅章君」とあるではないか。10本以上の幟と数十人の町の人々の最前列中央に緊張した面持ちの青年が立っている。

その後、『もうひとつの「歴史散歩」「佐倉連隊とその時代」を歩く』を最近まとめられた山倉洋和さんにお目にかかることがあり、お聞きしたら田代恵一さんは雅章さんの弟さんで、今も80歳すぎて矍鑠としていらっしゃる由、伺ったのだった。

佐倉遊郭の凱旋記念ハンカチ

パートⅢでは連隊を支えた地域に焦点があてられ、興味深く思ったのは、連隊周辺の商店街の地図の再現であった。地元出身ではないものの、1940年ころの町並みが彷彿とするではないか。飲食店、宿屋、写真館、軍服店、洗濯屋など連隊関連の商売が盛んだったほか、たたみ屋、ブリキ屋、桶屋、染物屋などが並ぶが、今の子どもたちには想像がつかないのではないか。海隣寺坂を上りきった、現在の市庁舎を通り過ぎたあたりの並木町には現在も地元名産のヤマニ味噌の店、ピーナッツの大津屋の名も見える。また、入隊時の盛大な見送りの返礼として除隊記念に盆・盃・湯のみなどを地元業者に作らせ、関係者に配るという慣習があったらしい。太平洋戦争が始まる直前には、時局柄その慣習を戒める文書が徴兵検査の父母心得として千葉県兵事官の名の文書で配られてもいる。なお時代は遡るが、「凱旋記念・歩兵第二連隊萬々歳」と中央に刷り込まれた汚れたハンカチが陳列されていた。佐倉遊郭が日清・日露戦争の凱旋兵士に配った歓迎の記念品だったという。一方、検閲下にありながら、兵士から家族に宛てられた「軍事郵便」のいくつかは展示され、両親、妻子の暮らしを慮る気持ちがにじみ出ている。

地図と数字の背後には

佐倉連隊からの戦死者はいったい何人だったのだろうか。

パートⅣが今回の展示のメインであろう。戊辰戦争より太平洋戦争敗戦にいたるまで、歩兵佐倉連隊の兵士はどこでどのように戦い、戦死し、傷つき、帰還したのか、がたど

られる。私などの世代は戦前生まれでも戦時の記憶がほとんどない者は、どうしても地図と数字の世界での「戦争」になりがちである。現に、この展示も、原資料を残すすべがないのだから当然のこととは言え、写真や活字でたどることになる。

佐倉連隊は、1936年、二・二六事件への出動後、5月大連入港、満州国国境における戦闘を経て孫呉に移駐、1939年7月速射砲中隊はノモンハン事件に出動、多くの戦死者を出す。第57連隊は1944年グアム、レイテへの転出まで、孫呉を中心に対ソ国境警備にあたった。1937年8月上海事変後、佐倉では予備役が召集され、第157連隊が組織され、中国軍との戦闘に動員された。その後も多大な戦死傷者の補充のため1937年10月から39年8月まで佐倉兵営から動員、39年12月には独立歩兵第90大隊として再編され、さらに1945年まで補充される。大隊の「移動図」と「補充兵補給年月・場所・人数と月別戦死者数」の図表はその過酷さを語っている。1943年佐倉では第2次第157連隊（南部部隊）が再組織されるが、4月南京均衡に到着、以降治安・鉄道警備にあたったが、1945年3月、対米戦争のため上海に集結するが、戦史を残した第7中隊以外の動向の詳細は不明だという。1939年2月、山東省西部の治安維持部隊、対抗日ゲリラ要員として212連隊は第57連隊の留守隊によって組織されるが、1943年12月、インド、インドネシアに向う。1944年2月第57連隊第3大隊、谷島大隊は、孫呉からグアムに向かい、628名中、生還できたのは63名に過ぎなかったという。この第3大隊の小隊長以上の戦死月日と場所が図示されていたが、他の兵士たちの戦死の日や場所を思わずにはいられない。1944年7月第57連隊、宮内連は、上海からレイテに向かうが、1945年8月15日現在、生存者は、2541名中114名であったという。こうした軌跡をたどることさえも、今の私にはおぼつかない、不確かさが残る。まさに、地図と数字でしかたどれない戦闘であり、戦争であることがおそろしい。その場所や数字、名前すら正確にわからないことが多い、という。

だから、いま、戦地体験者の方が「戦争」を語ることの大切さがつくづく身に沁みるのである。

軍犬「ふさ」の墓の傍らで

今回の展示は、新聞紙上や地域誌などでもよく紹介されていたと思う。その際、軍馬・軍犬の墓が写真入で載っていたこともある。少し前のNHK土曜ドラマ「運命の犬デュロン」に登場した、戦地に軍犬を捨ててきたことに終生苛まれているという軍犬係だった元兵士（大木実）の姿と重なり、是非お参りしたいと思っていた。いまは、歴博の広い駐車場になっているその柵の外、わずかな斜面に、そのお墓はあった。軍馬「北盤」と軍犬「房」の墓石は背中合わせにひっそりと建てられていた。「房」の墓誌には昭和7年とあったから、いろいろな意味で、まだゆとりのあった時代だったのかなとも思う。しばらくその傍らの木陰に休んでいたが、訪れる人はなく、駐車場や歴博の広い階段に動く人影を眺めていたのだった。